

「たり」の非例示用法が表す意味合い—日常会話コーパスの用例分析を中心に—

岡田祐希（オカダユウキ）・広島大学

「たり」には、(1) のような「例示用法」と (2) のような「非例示用法」があるとされる ((1) は寺村 1991 : 130、(2) は山内 2015 : 会話 2 から引用)。

(1) 土曜日にはテニスをしたり、小説を読んだり、ギターをひいたりして過ごします。

(2) 結婚しないしないって言ってた人が、急に結婚したりするよね。

森山 (1995) は「たり」について、「一部列挙」という特徴を持つ並列助詞で、並列使用でも単独使用でも「まだほかのことがあったという可能性を残す (森山 1995 : 137)」と述べている。ただし、(2) の例では、「たり」で明示する以外のことが想定しにくく、「非例示用法」に必ずしもこの記述が当てはまるわけではなく、この点については議論の余地がある。

森山 (1995)、大和 (2008)、山内 (2015) は、「たり」の非例示用法の意味合いに〈評価性〉〈意外性〉〈可能性〉があると指摘し、陳 (2022) はそれぞれの意味合いが連続的であると主張している。しかし、これら 3 つの意味合いの判定は、異なる研究者による独自の判断基準に基づいているだけでなく、3 つの意味合いの関係性については十分な論拠が示されていない。「たり」の非例示用法について、日本語文法研究への一助とするには、統一された観点からの分類と実例に基づく考察が必要であると考えられる。

そこで、本発表では「たり」の非例示用法の意味合いについて、分類の妥当性の検証と統一された分類基準の記述を行うことを目的に、「日本語日常会話コーパス (CEJC)」の用例を以下の条件で収集・分析した上で、考察を行った。対象データは、短単位検索を用いて「キー：語彙素タリ and 品詞-中分類-助詞-助動詞」でヒットした 2,226 件から、「前後の節にタリ and/or ダリを含む」ものと、「後節がトカで始まる」ものを除く 780 件であった。これらを、先行研究で示されたそれぞれの意味合いの生起条件や、「たり」に前接する事態がどうであるかという観点で目視による判別を行った。

ランダムに抽出した 100 件を分析した結果、いずれの意味合いか判断しづらいものも複数換算すると、例示用法が 50.9%、非例示用法の可能性が 24.5%、意外性が 15.3%、評価性が 17.1%となった。なお、一つの意味合いであると判断しづらいものは、例示か可能性・可能性か意外性の意味合いがどちらも読み取れるものであった。この結果は、陳 (2022) 主張する非例示用法と例示用法の関係性が連続性を裏付けるものとなった。

分析結果を踏まえ、本発表では 2 点を主張する。

まず、先行研究による分類の妥当性の低さである。先行研究では 3 つの意味合いが確立していることを前提に関係性を見ようと試みていたが、実際は、それぞれが連続的で綺麗には分けられないものであるというのが前提にあると考える。意味論的にはいずれも「生起の必然性がないもの (本多 2007)」として示されるが、会話参加者が共有する背景知識や会話場面に応じ、出現する語用論的効果が異なると考える。

次に、統一された分類基準の記述については、上記の本多 (2007) 及び、中俣 (2015) の「あるテーマに関して出現可能性をもつ事態を提示するという機能から可能性を表す用法が生まれてきた」という記述を支持する。